

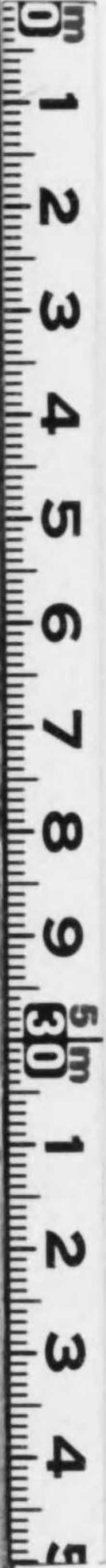
255

特254

878

津田信吾述

日英經濟戦の激化と國民の決意



始



特 254
878

目次

- 一、綿業を中心として日英經濟の對立
- 二、日印問題の骨子
- 三、印棉不買問題の討論
- 四、日本綿布の將來に就て



世界經濟會議は事實上の潰滅に終つたが、英國は一方に會議の成功を庶幾しながら、他方に會議中に於て屬領殖民地を總動員して經濟プロックを強固にし、關稅障壁を高めて自國産業の保護發展を計り、舊態の挽回、勢力の伸長に吸々として、國際道徳、通商條約を、一片の反古と化し去つたことは、アングロサクソン傳統の老獪、狡猾さとは言へ、大國民の態度として看過すべからざる事態である。

然かも英帝國の此の鎖國的經濟國策は、明らかに我が國を目標とし邦品の世界進出を阻止絶滅せんとする意圖に出でたることは論ずるの餘地無く、最近我が國工業界の異常長足なる進展が、英本國の産業界を壓迫し、その生存の基礎を危殆ならしめた結果、産業資本家の走狗となりたるマクドナルド内閣の必死の窮策と見られる。

さり乍ら老大國英國が、既に衰退期に入りたる自國産業の延命の爲め、その屬領、殖民地の住民の利益を無視し、之れを犠牲として敢えて辭せない。非人道的搾取振りに至つては、世界人類共同の敵として、その誤れる國策、飽くなき暴戾を木葉微塵に紛碎し盡さねばならぬ。

殊に最近英國は、その屬領、殖民地を以つて満足せず、經濟關係密接なる第三國をも自國經濟政策下に統制せんとし、支那方面にまでその魔手を伸ばさんとしてゐる。

此の時に當つて我が國民は、彼れの暴戾に對して如何なる對策を講ずべきか、眞に一大覺悟を要すべき重大時である。

吾人は此の點に鑑み、日英經濟戰の一大目標たる本邦綿業の將來に就き、斯界の大權威たる鐘ヶ淵紡績社長津田信吾氏に乞ひ、その該博烈々たる文字を得て之を江湖に問ひ、以て國民の決意を促さんとするものである。

素より日英經濟戰は單に綿業のみに止まるものではない。けれども一以つて十を知る、賢明なる讀者は、必ずや本書に依つて啓發され、國民的大運動を起して、英國をして反省せしめ、その誤れる國策を是正せらるべきを信ずる。

日英經濟戰の激化と國民の決意

一、綿業を中心として日英經濟の對立

綿業を中心として見た日英經濟戰は今後どうなるか。

英國が有する紡績の錘數は、世界の總計一億六千萬錘の三分の一即ち五千萬錘であつて、二十年前即ち歐洲大戰以前に比すれば五百萬錘を減じたのである。然るに日本紡績の錘數は八百萬錘であつて、それを歐洲大戰前の二百三十萬錘なりしに顧る時は、非常なる進歩であるが、錘數に於ては未だ遠く英國に及ばない。所が日英兩國の輸出力には大差がないのであつて、即ち昨年中の英國綿布輸出高は二十二億平方碼であるのに對し、日本の輸出高は二十億三千萬平方碼で其差僅に一億七千萬平方碼に過ぎないのである。又本年

上期の輸出量は英國は十億八千三百萬碼、日本の十億三千五百萬碼と比べて僅に四千八百萬碼の差あるのみと云ふに至つては、日英綿業の優劣、今更ながら多言を要しないのである。

英國の綿業とはどんなものであるか。今より二十年前即ち英國紡績が凋落に入つた一九一三年歐洲大戰直前に於ても、尙ほ彼れは綿布輸出の總量實に七十億七千五百萬平方碼を有し、英領印度へ三十億五千七百萬平方碼を輸出したと云ふ豪勢振りであつた。而も三歳の童兒と見縛つた日本に世界到る處で今日追廻はさるる窮狀に陥つては、憤慨措く能はず種々無理難題を我國に持ち懸けるのも亦己むを得ないであらう。併し乍ら綿布なるものは、人類生活の必需品であり、安價良質の衣類を世界の隅々迄供給するすることは文明人の義務である。未だ幾億かの土人は裸體で暮して居るではないか。日本綿布ありて初めて彼等の需用を満足させ得るのである。日本綿布は彼等にとり實に平和の使節として歓迎されて居るのであつて、近年日本綿布が盛んに印

度アフリカの奥地深く其進路を拓き得たのは世界人類への福音でなければならぬ。然るに英國は自國の領土を口實として六割八割と云ふが如き重税を土人の衣類に課税し、以て自國産業の保護に資せんとすることは許すべきでない。世界の人類は怠け者の英國綿業者の犠牲として生れ來つた者ではない。日本綿業者が一致團結して英國の挑戦に應じ、敢然として起つたのは此點だけでも大なる意義を有するもので、況んや其生命線を脅かさるるに於いては寧ろ當然なことである。

纏つて茲に英國綿業の過去と現在とを簡単に述べて見やう。英國の先輩は其の技倆に於ても人物に於ても今日とは比較にならぬ程優れた人々であつた。彼の産業革命を成就したのは彼等の先輩であつた。手紡車から今日に傳はる紡績機械を創造したのも、力織機を發明したのも皆彼等の先人であつた。そして帆船に乘じ喜望峯を大迂回して印度の棉花を積んで歸り、紡績にかけた糸を又積んで東洋へと次第に彼等の進路を開拓した。其勞苦が積り積つて今

日の大英帝國を築き上げたのである。英國は綿業立國を以て國策として居る。絹布が入用なれば綿布にシルケツトを施し、又はシユライナーを懸けて光澤を出し、以て絹布に代用せしめ、麻が入用なれば擬麻法を施して代用すると云ふ、綿布萬能主義を標榜し來つたのである。大英帝國繁榮の因は實に茲に存すると云ひ得るのである。

併し乍ら彼れの繁榮は生活の向上となり慢心となり、廳て事業の根柢を失つたのである。殊に歐洲戰爭は數百年來築き上げた富と幾千萬の人命とを全く無益に浪費し盡した上に、貴重なる文明と哲學とを叩き潰して終つた。嘗つては思想の堅實と常識を以て誇りとした英國人も、歐洲戦後は思想的には露國の後塵を拜し、生氣なき國民と化し去つたのである。嘗つては自由通商主義の大旗をかざし天下を横行した英國人も、急角度の轉回を行ひ、大英帝國經濟プロツクを結成して其蔭に匿れ、やれ特惠、やれ高率關稅だなどと悲鳴を揚げざるを得なくなつた。其意氣地なさは何と評すべきか。英國の先輩

は地下瞑目し能はぬであらう。今日英國の首相が労働黨の首領であることを考へたならば資本主義英國は既に没落して居ると思はれる。従つて今英國は労働者の天國である、夫れは悲しむべき天國なりと云ふに躊躇しないのである。彼等は日本綿布に對抗し得ざるの理由の一つとして、日本の紡績は賃銀が安いとか生活の標準が低いとかいふ事を道具に使つて辯解するが、斷じて許すべきではない。日本紡績の生活標準は遙かに英國に優つて居る事は日本紡績を親しく觀た英國人の等しく認るところである。而も彼等が此事を云ふのは質の問題でも量の問題でもない、要は様式の相違に歸する。換言すれば澤庵とチーズとの争であるのである。日本の紡績は六十年間、捨子の如く苦慘を嘗めつゝ發達して來た苦勞人であつて、研究と努力は大したものである。そして機械と設備と熟練とは斷じて世界をリードしたのである。

英國に於ては綿業は國家の基本産業であり國策として極端なる保護を加へる。彼等は政治上に有する彼の便宜と勢力とを濫用する。夫れがために發達

した英國の綿業は亦夫れが爲に亡びつつある。保護も過ぐれば對外的に競争力を失ふ。今日英國の紡績職工は何と云つてゐるか。「俺達は祖父の代から樂々として暮して来た、仕事に變りはない、それに種々と注文をつけたり暮しが苦しくなるのは政府の政治が悪いからだ」で通して居る。そこに研究と改善が行はれない。競争者が東洋にある事は丸で忘れて仕舞つた。歐洲戦後の英國紡績は全くトレード・ユニオンに占領されて居るのである。經營者は單に原料の買入れと製品の販賣を司るのみで工場に關する一切の行政はトレード・ユニオンの支配下にある。それが爲めに失業者を出す心配から、自動織機の採用を拒絶して居る。又衛生を口實として印度の棉花の使用を承認しない。經營者が日本に倣ふべく必死になつて説き廻つても、そんなことをしなればならぬのは政治が悪いからであるとして取合はぬ。日本に於ては平均二十臺の織機は一人で受持つのに英國では六臺である。此六臺も勞資四年の闘争の結果近頃四臺から六臺に改めたと云ふ一事を述べただけで、日英の比較は

明白なりと斷ずることが出来る。

二、日印問題の骨子

次に今日の問題である印度市場に於ける日英綿業の對抗問題に移らう。印度紡績は二十年以前には六百萬鍾であつたのが、現在では九百五十萬鍾に急速なる進展を遂げて居るのである。其内三百六十萬鍾はボンベイ州にあり、他はアーメダバット其他に散在して居る。そして常に問題を捲き起すのがボンベイの紡績であつて、損をすると關稅を引上げよと、年中騒いで居る。そして關稅を上げて助かるのはアーメダバットの紡績であつて、ボンベイ紡績は相變らず損を續けて居る。ボンベイ紡績が損をするのは何故かと云ふに經營を請負制度にして居ると云ふ根本的誤りの外に、労働者が英國同様に組合の支配下にあるのが其原因である。印度紡績の發達はボンベイの保護政策により地方の紡績が伸びて居るのであつて、今後十年を出でずして自給自足の國と

なり、日英兩國の綿布が不足になるかも知れぬ有様である。

昨年同國へ輸入した綿布を比較すると、英國は六億碼、日本は六億四千五百萬碼である。然るに昨年八月印度が日本綿布に對し三割一分二厘五毛の關稅を五割に引上げ、英國は二割五分に据置いた。其結果日本綿布は落潮となり、英國綿布は其勢を盛返して居る。此傾向は明かに日英關稅の開きが多過ぎる事を明白に證明して居る。換言すれば此れ丈けの差を設けられては印度市場は英國に獨占されるのである。然るに英印兩國は夫に満足せず、七月六日を以て日本綿布の關稅を一舉に七割五分に引上げ、英國は二割五分に据置いたと云ふ事は、日本綿布の入國を嚴禁した以上の虐待振りである。右關稅引上前に於ても既に日本綿布は減退しつゝある。現に今年上期の日英綿布を見れば、英國は二億八千七百萬碼に對し日本は二億六千八百萬碼であつて、昨年に比べ既に其地位は轉倒した。

此數字の内には印度の形勢不穩と認め五、六兩月印度向綿布を投げ賣りした

額を加へての計算であつて、最早印度市場から絶縁された事には一點の疑はない。今に至つては全く議論の餘地は無いが、七割五分の關稅なるものが英國に比し如何に不公平になるか云ふことを實例を擧げて證明しやう。印度の口實は日本の爲替が下つたからと言つて居るが、綿製品の價格は原料が六割て工費諸掛が四割である。そして原料棉花の相場は世界共通であつて日本丈けが特別安く買ふ譯には行かない。それに棉花は全部外國から輸入して製品として出すのであるから、原料に關する限り爲替の影響は差引零となる。日本綿布が外國に於て競争し得べき力は、綿布の工費四割の範圍に限らるるのである。

今印度市場で日英印三國の綿布が關稅の爲めにどの程度に苦しみを受けるかを計算するに、日本綿布は原料六割、工費諸掛四割、關稅七割五分であるから、金額にすれば原棉六圓、工費諸掛四圓、合計十圓の原價に關稅七圓五十錢を加へ、十七圓五十錢で賣つたのでは一厘の利益もない。

然るに英國綿布はどうか、原料と工費の割合を日本と同じとするならば、關稅の差額五圓丈けは利益が浮くのである。日本綿布が英國と印度で對立するには工費の全部を零にして尙ほ一圓不足となる。又印度綿布に對抗するには工費を零にした上、原料代の半額を損しなければ輸出は出来ぬと云ふことになる。最早印度は日本綿布の輸入を嚴禁したことは明白であつて、此儘ならば印度市場には日本綿布の姿を消すであらうここに疑の餘地は無い。

最早漫然として時を移すべきではない、今は力の問題であることがはつきりと判る。國策なき日本は民間業者が其解決策を講じなければならぬ。六月十三日紡績聯合會が印棉不買を決議したのは當然のことであつて、其の勝敗如何は、全英領に對する勝敗を決するのみならず、全日本貿易の消長に關する問題で、絶対に負けることは出来ないのである。英國人は相手が弱しと見ればどこ迄も追撃する國民である。火蓋を切つた以上は徹底的に勝たざるを得ない。

三、印棉不買問題の討論

英國は今や其國策として日本綿布を彼れの屬領より逐はんとし、其經濟プロツクをたのみ、高關稅網を屬領全部に張り終つた。最早誠意の有無を論じ外交交渉を空頼りするのは無用の沙汰である。どこ迄も力の問題として解決する外はない。今更歐洲大戰當時、我國が英帝國の爲めに盡した戰跡を回顧し、又はワシントン會議に突如として日英同盟を破棄した彼れの身勝手を責むるは無用のことで、國際聯盟脱退による外交上の日本の弱點を衝かんとする暴舉に對しては、只力により解決する外に途なしと信ずるのである。然るに印棉不買の効果如何につき種々異説を吐く人があるから、夫れ等の點に觸れて話を進めやう。

第一は印棉不買は日本綿業に不利なりとする説である。即ち日本綿業の強味は下等なる印棉の混用にある。然るに此德用棉を止めて米棉を使用する

のは自ら天に唾するのであると言ふのである。

成程平時の議論としては其通りであるが、印度の日本綿布不買問題を對象としては此論は問題にならぬ。印度棉が米棉より安いのは塵が多い上に質が悪くからであつて、眞の徳用であるとは云ひ難い。今印棉の代りに米棉を使へば、綿糸一梱につき十斤節約が出来る。又出来高を増すから工費が減る。其上製品が向上するから高値に賣れると云ふ利益を差引けば案外損害は軽い。一年を通じ全國の損害六、七百萬圓、多くて千萬圓、決して少額の損害ではないにしても、印棉不買が英印兩國に與ふる損害に比すれば問題にはならぬ苦痛である。

加之此損害を避くる方法は他に求め得る。即ち日本は今後印度棉を絶対に買はぬことを世界に誓つたならば、代用棉の供給を志願し來る國はいくらでもある。支那、ブラジル、トルコ、ペルシヤ、ニュウギニヤは直ちに此れに應じ得る。今後買約を確實にするならば數量は何程にても出来る様になる。

今日は世界に棉花が在り剩つて居る。米國には一年分の産額千三百萬俵を持って餘して居る。どこの國でも棉花の賣込を願つて來る。何となれば日本が印度から輸入する數量は最近十年を平均し、一俵年百六十萬俵、此代金二億四千萬圓であつて、此不況時代に二億四千萬圓の國家收入はどこの國でも歓迎して呉れる。遠くの國から不便だと云ふならば、滿洲國でも樂々出来る。現に拓務省は滿洲國の國策として棉花栽培に力を入れて居る。夫れでは手間がかかるかと云ふならば、米國で不用な過剩棉を特價で譲受ければ一舉兩得であり得るのである。

第二 印度貿易に關係せらるる人々は、印棉不買は徒らに印度人の感情を害するのみで實益はないと頻りに平和論を稱へる。御尤も千萬に聞えるけれども、日本の相手方は印度の農民ではなく英印政府である。又印棉不買は結果であつて原因ではないと御答したい。印度に輸出した日本綿布、即ち輸出綿布の三割二分は既に印度で殺されて仕舞つた。そして印棉は不要になつて居

る現實を明確に認識した上で議論して貰ひたい。今後殺されはしないかと云ふ時代ならば平和論を可とするのであるけれども、七割五分の關稅により嚴禁された以上は、正當なる關稅に引戻さない限り、印棉不買は解除する事は事實上出來ない相談である。此點から云へば印棉不買を行つたのは印度の關稅であつて、聯合會決議の結果ではないと云ひたいのである。然るに此問題につき印棉不買を不可なりとする論者の言は此問題の重點を知らず、今後印度が課せんとする産業保障法の重壓を怖れ圓滿主義を可として居る。

夫れは今尙ほ餘命を存して居るところの雜貨類の輸出に障害になることあるべしと云ふことにはなり得ても、綿業に關する限りは既に死んだ問題である。〔此上何百割の課稅をしやうが、保障法を振り廻されやうが何の痛痒をも感じない。今日に及んで綿業者に印棉不買は不利益であると言き廻るのは、病人が死んでから醫者を迎へにやる様なものである。さり乍ら、日本の綿業者は自分達の運命がきまつた上は他の貿易品はどうでもよいと思つては居な

い。助かるものならば御助けしたいのであるが、今日の場合、先方には藥程の誠意もない、英印のみならず、大英帝國經濟ブロック強化を國策とし全面的に日貨封鎖を行ふのは彼れの眞意であることに微塵の疑はなく、今日は綿業の問題であるが明日は雜貨の問題となる。結局日本物貨の全滅を期さなければ止まないのは明白である。而して對印、對英の武器は羊毛と印棉とである。印棉不買は日本紡績が有する只一つの防壁であつて、今綿業者は英國の暴舉を日本産業共同の敵として戦ひつつあることを御諒解願ひたい。

第三 印度人や英國人は何と云つて居るか。印度棉は日本に絶対に必要である、日本紡績の發達は印度棉の御蔭である。印棉を買はぬなどとはよく言へたものだ、日本は印度棉なくして成立せぬと云ふのが彼等の考へ方である。斯の如き了見を以て關稅を引上げ、そして吾々をして印棉の不買を行はしめたのである。印棉不買は單なる恐喝に過ぎずと信じ、日本は無力なりと豪語した印度の支配階級は、新棉の出盛りになつて印度國民に何と申譯をするか

興味ある問題である。

第四 日本の印棉不買は英印兩國の紡績を利益するのみであるこの説は、既に申述べた様な英國の實情であるから、十年も前から印度棉の使用を頼んでも勞働組合が承知しない、夫れが爲めに英國は僅かに十萬俵の輸入に過ぎない。此れを以て今後英國が日本に代り得ることを考へる事が出来ないものである。印度に於ても同様であつて、自給自足に達せない印度紡績から、日本紡績が第三國で苦しめられると思ふのは大なる認識不足である。

第五 日本の印棉不買は佛蘭西、伊太利、獨逸の紡績を利益するに云ふ説がある。

昨年度印棉を使用したのは佛蘭西が十三萬六千俵、獨逸が九萬九千俵、伊太利が九萬七千俵であつて、日本の百六十萬俵の代りを勤め得ることを考へるところに誤解がある。それは兎も角、此等の國々が印棉を使用し日本と競争して、世界の市場に安價良質の製品を供給して呉れるならば、それは人類幸福

の増進であり、又平和事業に貢献するのであるから、日本紡績は大なる満足を感じずる次第である。何となれば日本紡績が飽く迄英國に下らないのは、英國は世界の四分の一を領有して居る。而も此等領土の幸福を願ふとはせず、生活の必需品たる綿布に高關稅を課し以て本國の犠牲たらしめんとするからである。之れに反し佛蘭西其他の國は、英國の如き大なる領土を持たないのであるから、是等の國々の繁榮は寧ろ歓迎せざるを得ないのである。

第六 印棉不買は印度農民を苦しめるのみで、英印兩國を反省せしむる力にはならぬ。英國は印度民を犠牲とする如きは年中行事である。而も印度には輿論が起きない。印度民は無智であり一切無分別である。輿論は起き得ないから、印棉不買は無効であると説くものがある。此議論は印度に住んだ事のある人の口から出るから相當有力に傳はるが、是亦大なる誤解なりと考へざるを得ない。

印度は今英國から極端なる壓迫を受けて居るが、決して甘んじて居るので

はない。言論の自由は全く奪はれて居る。五人寄れば警察に引かれ、十人集ればピストルが飛ぶ。ステッキ一本持つことさへ許されない。新聞雑誌は極端なる取締を受ける。全く自由が奪はれて居ることに異論はないが、輿論が無いのではない。只其輿論が表面化されないで居るに過ぎない。換言すれば空騒ぎをしないと云ふに過ぎないのである。

印度人は馬鹿騒ぎはしないが、印度には所謂無言の抵抗がある。此運動は燎原の火の如く擴つて居る。其底力は偉大なものであつて地底に恐るべき業火が燃えて居る。噴火山上に眠る英國の不安は、ガンヂーを牢から出したたり入れたりして御機嫌を取つて居るではないか、無言の抵抗、是れ程有力なる輿論が世界に求め得られるか。又永久に印度が英國の犠牲として存在し得るか。大なる疑問と云はなければならぬ。印度から歸つた人は印度の關稅引上げは英國の指金ではない、印度紡績の運動であることを辯解された。併しながら印度の關稅引上げは、印度になき製品にも高率の關稅を課したのはどう云

ふ譯か。又印度と時を同うして他の屬領が一齊に引上げたのはどう云ふ譯か。怖るべきは巧妙なる英國の外交である。老獪なる英國外交は印度在位の日本人をして斯くの如く思はしむる程の芝居を打つて居る。そして農民に向つて印棉不買の反感を日本に向はしめんとして居る。併しながら其反感は英國に向けらるべきであつて、日本に向けらるるのは御門違ひである。

第七 印棉不買は英印を反省せしむるに充分なる力を有することを御話し申上げやう。茲に面白い話がある。先づ日印貿易の全體を調べて見る。最近二十一年間に日本は印度から二十六億圓買越しになつて居る。つまり年々一億三千万圓の帳尻勘定を日本から拂つて居る。そして不思議なことには、印度と英國との貿易を調べると、二十一年間に是亦印度は英國から二十三億圓買越して居る。即ち一年一億一千萬圓帳尻勘定を印度は英國に支拂つて居る。何んの事はない、毎年日本から受取つた年金は、其儘印度から英國へ奉納して居ることになつて居る。

日印英三國の關係斯の如しとして、今日日本が印棉を買はなければ印度の收入は其代金二億四千萬圓を減少することになる。而も其棉の買手が無いことは既に述べた通りである。昨年印度は日英兩國から六億碼宛綿布を買つて居った。其財源は何かと云ふに輸出棉花の代金であるべきは申す迄もない。今後日本から綿布は買はぬのであるから。其代金の心配がなくなると同時に、英國綿布を買ふ財源をも失つた事になる。今や英國は印度市場を獨占する爲めに日本綿布を撃退し、同時に英國綿布の賣場を失ふと云ふ羽目に陥る。此政策は明かに自殺行爲であることが判然するのである。單に英國綿布が自殺するのみでは濟まない。日本の印棉不買に伴ふ印度の減收は直接間接に英本國に響く、謂はば一石二鳥の働きをする。

又日本紡績は何れにしても印度で失つた販路を英領以外の第三國進出に於て補ふならば、何の苦痛もない譯である。印度棉花の産額は一年四五百萬俵であつて、其半分は印度紡績が消化し残りを輸出するのである。而して其大

半は日本が買つて居る、印度棉花の栽培は日本紡績が與へた保護の結果である。斯の如く日本は印度を保護するに反し、英國は印度を寶庫として吸上げる計りである。斯の如き不合理は此際清算するを可なりと信するのである。

第八 印棉不買が印度に重大關係を及ぼす今一つの力の説明を附加へる。印度の面積は百八十八萬平方哩であつて、其三分の二は英國直轄の十五州である。併しながら他の三分の一即ち六十萬平方哩、此住民七千萬人は、英國の自由にはならぬ所謂印度の王領であつて、其數は七百四十に達する。何れも自分の兵隊を養ひ半獨立の國家として存在し、その其宮廷の費用は多く棉花の栽培又は其賣買の利益を國の費用に充てて居る。此王領の中にも大なるものは朝鮮の二倍程のものがあり、又其中でもセイロン島とカツチ島とは何れも立派な港灣を有し外國と貿易をして居る。印度政府が綿布關稅を七割五分に引上げて、セイロン島は一割、カツチ島は八分の關稅で頑張つてゐるが、印度政府はどうする事も出来ない愉快な國柄である。従つて物價は廉い。今後

他の王領に比し物の値段に天地の相違が出来ても平氣で済むか。綿布は國民の生活必需品である。目と鼻の先きにこんな相違を眺めて英國の御爲めのみを圖り得るか。果して輿論は起きないか、研究を要する次第である。況んや日本は今後印棉を買はぬ。王領の収入は減ぜざるを得ない。そして其原因が日本に對する英印國策の不當にあることを覺つた時、農民に聲なしとしても王領七百四十が果して不平なきを得るや、印度の將來は決して簡單ではない。印度に於ける日英經濟戰並に印棉不買問題の得失は、是以上申述べることを差控へる。但し英國國民は利害の打算には極めて敏感であり常識的であるから、必ずや近く英印兩國は反省するであらうと考へる。だが火蓋は切られた計りてあり新棉出廻りの十月を迎へざれば實戰に入らないのであるから、今後充分の覺悟と決心を要する次第である。同時に問題の性質を知らず無暗に平和を急ぐのは百害あつて一利なしである。然るに一部の人は一日も早く印棉問題の和解を圖らざれば日本の紡績は潰れて終ふ様に心配をして居るが、

今日本には印棉の買留がある。充分使つても本年中、少しく喰ひ延べ策を講ずれば充分來年の三月迄は用意がある。其後のことは代用棉で済む。況や將來の對策としては印棉に膠着するのは利益でない。廣く市場を分布する上から考へても他に代用棉の途を拓く絶好の機會を得たことを寧ろ喜ぶべきであると信ずる。

四、日本綿布の將來に就て

世界に流通する綿布なるものの總量は、凡そ五十五億碼内外と推定さるるのである。然るに其内英國が二十二億、日本が二十億を占めて居るから。日英兩國は世界の綿業を二分して東西に對立の姿勢である。従つて兩雄並び立たず、今後共其争が激化するのを避くべからざる運命であり、攻防何れに利ありやは興味ある問題である。而して日本綿布昨年の輸出の割合は印度三割二分、蘭領印度一割七分、埃及九分、支那九分、滿洲及關東州五分、海峽

殖民地四分、土耳其二分、其他二割二分となつて居る。

元來日本綿布は支那を以て最大顧客として居つたのであるが、近年は支那に於ける日貨排斥運動の頻繁に顧みては、當業者として重きを支那に置くことは出来ず、次第に南洋印度へ其生命線を延長したのであつて、今日では印度南洋が其主力である。初め日本が支那から退却を始めた時は、英國は彼れの作戦の成功を誇つたであらうと思はれる理由がある。併しながら當時は今の如く日本が延び得る力があるとは考へ得なかつた。況や印度に殺到して英國を苦めるとは夢想だもしなかつたのである。二大勢力の對立は今後世界の隨處に争を生ずる。東を押せば西に延び、北を押へる時は南に跳る、已むを得ない運命である。日本は英國の如き領土を持たぬ、工業は發達したが商權は至つて微弱であることを遺憾とする。英國は全く反對の立場に居る。

日本の強味は只安い事にある。其安いと云ふことも永い保證は出来ない。米國の大インフレはやがて日本にも波及せざるを得ない。原料も工費も高く

なり得る可能性がある上に、爲替は國際貿易の運命を支配する。各國は今後經濟プロツクを固めて鎬を削るであらう。日本綿布の行先をどこに求むべきや。日滿プロツクは最大必要事であるが、滿洲の購買力が増すのは遠き將來である。日本内地は今春齒の値が高かつたので一億圓の豫算外収入が農民の懐に入つたから購買力が殖えた様に想へても、借金の返済に消えて行くから内地に頼る事は出来ない。

日支關係は多少緩和する様でも仲々當てにはならぬ。變轉自在の支那政府はダンピング税を用意して居ると云ふ。今日既に高率課税により殆んど輸入は止つて居る。此上増税してもしなくとも望みはない。ことに支那の内地は水害と共産土匪の爲めに購買力を失つて居る。此上の増加は當分先づ見込がない。

南洋はどうか。昨年日本綿布は日本から見ると一割七分であるが、南洋即ち蘭領印度から見れば輸入綿布の七割五分が既に日本綿布であつて、其後増

加して今は飽和状態に達して居るから此上の望みは薄い。南洋地方では日本品排斥を固執した支那商人は全然失業して、昨年支那本土に歸つた其數三十萬人と云ふ驚くべき現象である。同時に本國の和蘭綿布も全然賣れなくなつた。英國品も同様である。そこで此頃英國が和蘭と協定して對策を講ぜんとして居る。何れは魔の手が及んで來るものと覺悟しなければならぬ。此點から考へても、もう南洋の山は見えて居る。印度は何れ反省するにしても、今の處望む事は出來ない。斯く觀じ來れば日本綿業の前途は暗澹なりと悲觀もしやうが、此れは亦大なる誤解である。何となれば印度英國は今マンチエスターに動かされて、一時妄動して居るけれども、由來利害の打算には極めて冷靜な英國人である。日貨排斥は英國の利益でないことを覺つたならば、其態度を改むる事は明白である。日本が昨年英國プロツクから輸入した金額は四億七百萬圓であつて、日本から輸出した金額は三億八千五百萬圓で、二千二百萬圓買越して居る。其内主なるものは印度棉花と濠洲羊毛である。現在

は日本は眞剣に不買は出來ないと思つて居るから驚かぬ代りに、愈不買實行が知れ渡つたならば日本を敵として勝味のない戦を續ける程英人は利害に超然たり得ない。況や日印綿布問題の如き、其の真相を知つたならば譏然として妥協して來るべきは當然の道行である。要は日本が敢然たる態度を以て力の問題として争ふべき堅き決心を有するや否やに存するのである。然しながら彼尙此れを悟らず飽く迄抗争し來らば、日本は困るかと云ふに是亦心配はないのである。此場合に處しては更らに矛を執つて英國及其屬領の堅陣を衝くことである。英國は彼れの屬領を自由に支配し得るかの如き様を裝ふては居るが、仲々世の中は自由にはならぬ。印度丈けでも穴はいくらもある。印度の南セイロン島、印度の西カツチ島は一割と八分の關稅を嚴守して英國の命令には従はない。今後日本はシヤマ、ネパール、アフガニスタン、ペルシヤカツチ、セイロン其他印度の外部に日本綿布を積上げて攻め込む途がある。又濠洲が羊毛で立つて居るのは日本の御蔭ではないか。然るに綿布は英國か

ら買つて居る。今後濠洲が日本綿布を買はなければ、羊毛の不買を國策として行ふべしである。代用の羊毛は南米に求め得る。僅かにメリノの供給に不便ではあるが、メリノは主としてモスリンの原料であるから代用品には困らぬ。濠洲が近來少々日本綿布を買ふのは此間の消息を傳へて居ると思はるるのである。

アフリカに於ても英領は悉く關稅を引上げては居るがケンヤ、ウガンダ、タンガニカ、コンゴは、コンゴ盆地協約があつて英國が特惠を受くる事は出來ない。關稅は上つても日本綿布は尙進出し得る。アフリカ内地にも尙ほ餘地はある。中米南米亦然りて日本綿布進出の餘地は少くはないのである。日本綿布が印度から逐はれたならばの問題を考へるのは、自ら其力を恃まないのであつて、今日其必要はないのであるけれども、最後は歐洲列國を得意として斷然リードし得る力を日本が持つことを御記憶願ひたい。但し日本の工業力を世界的ならしむる要因としては、今後日本は工業よりも海外貿易の

獎勵を劃策すべきことを擧げざるを得ないのであつて、此點に關する英國の便宜は非常なるものであり、我國とは到底比較にならぬのである。

特にアフリカで考へさせらるることは、どこに行つても英國人が居を構へて居る。そして實勢力を握つて居る。然るに日本人は殆んど居ない。有力な市場に日本人が一人も居ないのである。受取人の居ない處へ日本品が延びる道理がない。日本の工業は殆んど歐米に負けては居ない。それと思ふ様に發展しないのは商賣が進まないからである。進まないのではなく、近廻りで樂々用事が足りた爲め遠征の機會を得なかつたのである。海外發展には日本は特に恵まれてゐる筈である。日本には世界無比の海運力がある。そして世界一の安價良品を世界の隅々に賣込むに苦勞はない筈である。南米中米は英國と北米の勢力範圍ではあるが其領土ではない。日本綿布の得意先は先づ此方面に擴がり得る可能性が多分にある。地圖を見れば地球の大部分は桃色に塗られて居る。併しながら英領のみが世界ではない。日本綿布の得

意先としては重要地方として歐洲がある。英國は五千萬鎊持つて印度棉花は一ヶ年僅かに十萬俵使ふだけで足りる。萬一の場合は日本綿業はいつ迄も印度人から棉を賣つてやると言ふ様な言葉を貰ふよりも、方向を轉換して英國綿布の販路を貰へば印棉は十萬俵で足りることになる。蘇國以外の世界は日本綿布の領土である。天の裁判は日本の正義に味方する。今日の苦難はやがて來るべき果報となる。此苦難亦甘受すべしと考へて居る次第である。

昭和八年八月十五日發行

【定價金拾錢】

著者 津田 信吾
 發行兼印刷者 漆島 參治

東京市神田區龜田町二八一
 印刷所 文化印刷社
 東京市神田區龜田町三〇七

發行所

東京市神田區内幸町一ノ三

東邦經濟社

電話銀座(57)三三五七番
 振替口座東京一四九二三番

終